名古屋女子大学　紀要　**50**（人・社）　255～265　2004

ブランウェル・ブロンテと『嵐が丘』

杉村　藍

Branwell Brontë and the Authorship of *Wuthering Heights*

Ai SUGIMURA

はじめに

ブロンテには謎が多い。伝記的興味もあいまって、そうした謎解きに熱中する研究者は多く、Tom Winnifrithはそのような傾向について次のように述べている。

> There has always been a feeling that we only have a part of the Brontë story, and biographers have rushed in to provide keys and clues to fill in the missing parts. . . . Sometimes the more fanciful biographers have tried to fill in the gaps with mythical Irish Brontë ancestors, a real life Heathcliff, Louis Parensell, a lesbian Emily and various authors for *Wuthering Heights*.[1]

謎解き熱が昂じた結果、伝記研究者がはまり込む研究テーマの一つとして「*Wuthering Heights*（1847）の本当の作者は誰か」が挙げられている。最近では*Wuthering Heights*をあえてEmily Brontë（1818－1848）から引き離して考えようとする者は決して多くはない。しかし、現在でもこの問題が取り上げられる機会があり、研究者は伝記的事実との関連や作中で用いられている方言の特徴などに注目し、それぞれの結論を導き出している。小論では、こうした作者特定の手段としてコンピュータを利用し、*Wuthering Heights*の作者問題に関して何らかの手がかりが得られるかどうか、その可能性を探るものである。

作者問題の発端とその研究

ここではまず、*Wuthering Heights*の作者問題がどのように生まれ、また研究されてきたかを、特にBranwell Brontë（1817－1848）との関連で簡潔に跡づけてみたい。[2] *Wuthering Heights*の作者がEmily Brontë以外に存在するという可能性を最初にほのめかしたのは、Branwellの友人たちであった。J. B. Leylandや、Francis Grundy, George Searle Phillips, William Dearden, Edward Sloaneらは、それぞれBranwellから小説執筆について言及した手紙をもらったり、彼が作品を朗読するのを聞いたりした経験から、新聞や自らの著書のなかで熱心に「Branwell作者説」を唱えた。

彼らの主張を引き継いだ研究者のなかには、Alice Lawのように、生きる気力を失った兄に希望を与え、彼を見捨てた姉Charlotteに知られることなく彼の小説（*Wuthering Heights*）を発表することでEmilyが兄に尽くそうとしたと、Branwell作者説を強力に主張する者がいた。[3] しか

しその一方で、Virginia MooreのようにBranwellの性格や当時の彼の衰弱状態などからそれを強硬に否定する場合もあった。[4] Branwell作者説を否定しながらも、Emilyと彼のとあいだには強い共感の絆があり、彼が直接その執筆に関わらなかったにせよ、何らかの影響を作品創造に与えているとし、*Wuthering Heights*が創造される背景にはBranwellが欠くべからざる存在であったと主張しているのは、Thomas James WiseとJohn Alexander Symington[5]、そしてMary Robinson[6]や、最近ではEverard Flintoffなどがいる。Flintoffは論文のなかで直接Branwellが作者である可能性をテーマとしているわけではないが、*Wuthering Heights*で用いられている言語、特に作中で頻繁に描かれる方言がどこから、また誰の影響によってもたらされたのかを問題としている。彼の結論は、Brontëきょうだいが初期作品を共有していたことで、Emilyが兄の'S 'Death'といった、方言を話す狂信的なキャラクターの効果的な用い方に触れ、それを自分の作品のなかに取り込んでいったのではないかというものである。Branwellが*Wuthering Heights*誕生に大きく関わっていることを指摘してはいるが、Flintoff自身もまた、彼がこの小説を書いたという説ははっきりと否定している。

But it is sufficient to show that Branwell anticipated and probably invented many of the situations in *Wuthering Heights*. This being so, it is tempting to push the issue further and to ask if Branwell might have had a hand in the creation of any other characters in the novel.

The answer initially seems not. Certainly there is nothing equivalent to either Catherine or to the finest female character of all, Nellie. [7]

このテーマについてもっとも新しい研究論文としては、中岡洋氏の「『嵐が丘』は誰が書いたか」が挙げられる。中岡氏は、Branwellの友人たちの証言の一致が共謀とは思えないこと、テキスト中での古典語の使用、Lockwoodの経験がBranwellの個人的体験と重なること、Josephに見られるカリカチャー、Emilyが作者である自分の身元を明かすのを極端に嫌がった事実や、彼女と妹Anneの日誌など、実にさまざまな視点から*Wuthering Heights*の作者について探っている。特に、Charlotte Brontëが1850年に*Wuthering Heights*第2版で発表した"A Biographical Notice of Ellis and Acton Bell"がEmily(Ellis Bell)がこの小説の作者であることを自明のこととして作者問題に一応の決着をつけたこと、この問題においてCharlotteの果した役割が大きかったことを指摘している部分は、他の研究論文にはないユニークな点である。[8]

現在では*Wuthering Heights*の作者がEmily Brontëであることに異議を唱える者はほとんどいない。しかし、だからといってその作品の誕生に関して兄Branwellの影響をまったく否定するわけではなく、研究者の興味は、彼の影響がどのようなもので、またどこに見ることができるのかといった点に移りつつあるように思われる。Branwellの影響をいかに具体的に指摘しまたそれを証明するかは、今後の課題といえよう。

コンピュータ・ソフトによる検証

前述のように、批評家たちは*Wuthering Heights*がEmily BrontëではなくBranwellによって書かれた可能性をさまざまに検討してきた。ここではこの問題に関して、もう一つの視点として、コンピュータ・ソフトを利用する方法を考えてみたい。具体的には、*Wuthering Heights*のテキストを、Branwellが執筆したと特定されている他のテキストと比較し、その結果を検討する。

Branwellのテキストとしては、"and the weary are at rest"を利用する。[9] これは未完の小説の

断片で、1845年の晩夏に書き始められたものとされている。[10] Emilyが*Wuthering Heights*を執筆したのは1845年の秋から翌46年の春にかけてであり、執筆時期が非常に近い、もしくは重なっているものである。Branwellがこの時期に残しているのはほとんどが韻文(詩)作品であり、1840年から45年にかけて執筆した散文原稿で残っているのはこの“and the weary are at rest”が唯一のものである。*Wuthering Heights*のような長編小説と比較するには、詩作品ではあまりに分量が少なくなってしまうことも、この断片を比較対照とする理由の一つである。ちなみに、Branwellの作品集を編纂したVictor A. Neufeldtは、Branwellの友人たちが*Wuthering Heights*を彼の作品だと思い込むきっかけとなった、Leyland宛の1845年９月10日付の手紙にある“I have, since I saw you at Halifax, devoted my hours of time ... to the composition of three volume Novel－one volume of which is completed”の「小説(Novel)」を、間接的にではあるがこの断片であると断定している。[11]

ここでは、比較対照するテキストとして、他にCharlotte Brontë(1816－55)の*The Professor*(1857)と*Jane Eyre*(1847)，そしてElizabeth Gaskell(1810－65)の*Mary Barton*(1848)と*Moorland Cottage*(1850)を利用する。*The Professor*は作者の死後出版となった作品であるが、執筆されたのは*Wuthering Heights*と同時期である。EmilyもBranwellも、ともにまとまった散文作品としては他に残っている作品がないため、同一作者によるテキストの比較材料として、同じくCharlotteが執筆した*Jane Eyre*を利用する。この小説は、*The Professor*が完成した直後、1846年夏から書き始められ、翌47年の８月24日には出版社に原稿が発送されている。同一作者による原稿であると同時に、非常に近い時期に執筆された作品でもある。また*Mary Barton*は、ほぼ同時期に刊行されたイギリス文学作品として比較対象とした。同時期の作品ということは、それだけ時代による言葉の用法に差異が生じにくいことを意味する。また、同一作者による作品の比較例として*Moorland Cottage*を挙げた。GaskellはCharlotteと親交のあった作家であるが、二人が出会うのはすでにEmilyもBranwellも亡くなった1850年のことであり、それ以前に執筆されたこの作品は、まったく異なった第三者のテキストとして有効な比較対象となるであろう。

ⅰ)“**CopyCatch Gold**”，**Related Phrases**

上記６つのテキストを用いて、作者特定を検証する方法として、CFL Software Development社のDavid Woollsが開発した“CopyCatch Gold”というコンピュータ・ソフトを利用した。これは、剽窃の疑いがある文章を取り上げ、その文章間で用いられている語彙がどの程度一致しているかを調べるソフトウェアである。互いに類似するフレーズを検索したり、単語をContent words(内容語。事物の名称、性質、動作、状況などを表現する語。名詞、形容詞、動詞など)とFunction words(機能語。言語の構造上必要となる語で、冠詞、前置詞、接続詞など、文法的な機能を発揮することを主要な役割とする語)に分類してそれぞれの出現回数を表示すると同時に、二つのテキストの間で共有されている語彙の占めるパーセンテージを表示する等の機能がある。

しかし、このソフトは本来、剽窃の可能性を検討するためのもので、例えば同じテーマや質問について書かれた二人の人物の文章が、実際に異なる人物によって別個に書かれているかどうかを調べるためのものである。そのため本研究のような、登場人物も場面設定もまったく異なる作品同士を比較するためにデザインされたものではない。そこで、開発者のDavid Woollsの助言を元に、ここでは類似するフレーズと、テキスト間で共有される語彙に注目してデータを見てみたい。

まず、類似するフレーズの検索については、“CopyCatch Gold”では合致する文字数を「5, 10, 15」の3段階に分け、さらに正確に一致する場合とおおよその部分が一致する場合とを選択することができる。ここでは精度を高めるため、合致する文字数を15とし、正確に一致する場合のみを選択した。こうして検索されたフレーズには類似性があると考えられ、それ以外のものとの比率を類似率としている。結果として、類似率と、二つのファイルのなかで15文字以上合致するフレーズが、そのフレーズの含まれるファイル名とファイル内での行数とともに示される。

ここでは、類似率と、共通するフレーズのパターン数を示す。共通のフレーズは、それぞれのファイルのなかで2回以上用いられている場合も当然あるが、出現回数はテキストの長さも関係してくるのでここでは併記しない。表のなかで、「Files」は比較した文章(作品)のファイル名、「Similarity」は類似率、「Phrase patterns」は共通フレーズの種類の数、「Words」は比較した両ファイル内の合計単語数を表わす。[12] なお、「BB」は“and the weary are at rest”, 「WH」は*Wuthering Heights*, 「MB」は*Mary Barton*, 「P」は*The Professor*, 「JE」は*Jane Eyre*, 「MC」は*Moorland Cottage*, それぞれの作品名と併記されている数字はその作品の該当章を表す。

表1：テキスト間の類似率と共有フレーズのパターン数

Files	Similarity	Words	Phrase patterns
BB－WH	62	140163	26
BB－MB	66	182079	32
BB－P	58	111848	16
P－JE	83	276906	209
MB－MC	75	200836	176
P1－JE1	27	5179	0
P1－P25	36	11550	0
BB－WH1	22	24914	0
BB－WH34	35	27386	2

表1の類似率を見ると、同一作者の疑いがある“and the weary are at rest”と*Wuthering Heights*の62%以上に、まったく作者の異なる“and the weary are at rest”と*Mary Barton*の方が66%と高い数値が出ている。これは、Branwellと初期作品を一緒に執筆して文学修行をともにしてきたCharlotteの*The Professor*との類似率58%よりも高い。これは、類似率が共有フレーズの数を元に表示されているためであるが、フレーズの数は当然のことながら対象となるテキストの長さによって大きく影響を受ける。作者は自分のもつ語彙、すなわちある限られた語彙数のなかで文章を組み立てる。文章は長くなればなるほど、必然的に同じ語が繰り返し用いられる可能性が高くなり、それと同時に繰り返される同様のフレーズの数も多くなるはずである。

そこで比較ファイルの総単語数を見てみると、やはり単語数の多いものほど、類似率がほぼ比例して高くなっているのがわかる。もっとも単語数の多い*The Professor*と*Jane Eyre*の組み合わせが、同時にもっとも高い類似率83%を示している。これは、同じ*The Professor*と*Jane Eyre*であっても、それぞれの第一章のみを取り出して比較すると、語数が減少すると同時に類似率も27%と大幅に低下するところからも、このソフトが表示する類似率が、比較ファイルの語数の影響を大きく受けることを明らかにしている。*The Professor*を用いた同一作品内の別の章(第

１章と第25章）でも、同様の結果が出ている。*Wuthering Heights*は最初の数章をBranwellが執筆したという説もあるが、“ and the weary are at rest ”と*Wuthering Heights*の第１章、最終章の第34章をそれぞれ比較した場合も、語数の違いのためか、第１章との類似率が22%、第34章との類似率が35%と大きな差はない。だが、これはすでに述べたように“ CopyCatch Gold ”がこうしたファイル間の単純比較のためにデザインされたソフトではないために、当然起りうる結果である。

しかし注目したいのは、共有するフレーズのパターン数が、同一作者による作品である*The Professor*と*Jane Eyre*，*Mary Barton*と*Moorland Cottage*において、それぞれ傑出して多いことである。これら二つの比較では、確かに対象となる語数も多いが、それを考慮に入れても、他より際立って多いのは明白である。語数の比較的近い“ and the weary are at rest ”と*Mary Barton*（182,079語）の場合と、*Mary Barton*と*Moorland Cottage*（200,836語）の場合を比べてみても、共通フレーズのパターンは32と176で、大きく差がある。

すでに見たように、使用語彙の共有率だけでは、特に文章の量が多い場合、繰り返しが増えることによって共有する部分が増大するため、単純にパーセンテージを見て作者が同一であるか否かを判断する材料とすることはできない。しかし、ある程度の分量をもつ同一の作者の作品間には、15文字以上でまったく同一のフレーズを検索した場合、多くのフレーズを共有している場合があることが表１から考えられる。そのように推測すると、同一作者の作品である*The Professor*と*Jane Eyre*，そして*Mary Barton*と*Moorland Cottage*の場合と比較して、“ and the weary are at rest ”と*Wuthering Heights*が共有するフレーズのパターンは26とかなり少ない。このパターンの数を見る限り、両者が同じ作者によって書かれたものであるという可能性はかなり低いといえるのではないであろうか。

ただし、今回は同一作者の作品の比較は２例を挙げているだけであるので、これだけでは無論充分な論拠とはならない。論拠として有効であるか否かは、もっと多くの作品間での検証が必要となるであろう。また、ここで挙げた例は、比較対象となるファイルの総単語数がどちらも20万語を超えていたが、この単語数が共通フレーズの数とどの程度関連しているのかについては、現時点では明らかではない。実際、表１からも明らかなように、単語数が１万語程度の場合は、同一作品内であっても章ごとに比較した際に共有フレーズが出現しない場合がある。これは、小説の場合、ストーリーの展開によって登場人物や場面設定が変化し、それに伴って用いる語彙も変化することが関係していると思われる。

ii）“ CopyCatch Gold ”, Statistics

では続いて、“ CopyCatch Gold ”の“ Statistics ”のページに示される、各ファイル間のContent words（内容語）やFunction words（機能語）等の一覧を見てみよう。表のなかで、「Files」は比較した文章（作品）のテキストファイル名、「Shared%」は各ファイル内で共有されている語彙の占めるパーセンテージ、「Content」はContent wordsに相当する語彙数（単語数ではない）、「Function」はFunction wordsに相当する語彙数（単語数ではない）、「Total」はファイル内全体、「Shared＞１」は使用語彙のうち２回以上繰り返されているものの割合、「Once only in both」は比較されている二つのファイルに共通して一度だけ出現する語彙と、それらの語彙が各ファイルで占める割合、「Only in」はそれぞれのファイル内にのみ出現する語彙を表わす。

表2：“and the weary are at rest”と*Wuthering Heights*のStatistics

Words	Files	Shared %	Content	Function
Total	BB		9834	12461
Total	WH		47367	71963
Shared＞1	BB	68%	6712	12434
Shared＞1	WH	60%	28298	71390
Once only in both			391	1
	BB	4%		
	WH	1%		
Only in	BB		2731	26
Only in	WH		18678	572

表3：“and the weary are at rest”と*Mary Barton*のStatistics

Words	Files	Shared %	Content	Function
Total	BB		9834	12461
Total	MB		65428	97484
Shared＞1	BB	68%	6730	12434
Shared＞1	MB	66%	43116	96950
Once only in both			380	3
	BB	4%		
	MB	1%		
Only in	BB		2724	24
Only in	MB		21932	531

表4：*The Professor*と*Jane Eyre*のStatistics

Words	Files	Shared %	Content	Function
Total	P		37537	51720
Total	JE		75352	112950
Shared＞1	P	84%	31494	51700
Shared＞1	JE	82%	61891	112911
Once only in both			853	5
	P	2%		
	JE	1%		
Only in	P		5190	15
Only in	JE		12608	34

表５：*The Professor* １と*The Professor* 25のStatistics

Words	Files	Shared %	Content	Function
Total	P１		1298	1948
Total	P25		3507	4794
Shared＞1	P１	43%	555	1919
Shared＞1	P25	27%	938	4588
Once only in both			120	5
	P１	9%		
	P25	3%		
Only in	P１		623	24
Only in	P25		2449	201

これらの表からさまざまな情報を読み取ることが可能であろうが、ここでは特に、各ファイルにのみ出現する機能語に注目したい。これは一つには、同一作者が書いたものであっても、内容語は登場人物の名前や場面設定によって作品ごとにまったく異なった特徴を示す傾向があるためである。例えば、“ and the weary at rest ”, *Wuthering Heights*, *The Professor*, *Mary Barton* のいずれにおいても、内容語で使用回数上位10語のほとんどを占めたのはそれぞれの作品に登場する人物や地名といった固有名詞であった。内容語の、少なくとも頻度の高い語によって作者を特定するのは非常に難しいといえる。しかし機能語は文法構造上の関係を表わすために用いる語であり、執筆する内容の違いによって影響を受けにくいと考えられ、本研究のような異なる内容の文章を比較する際に有効であると思われる。作家に限らず、人はそれぞれ独自の語彙の選択、文章構造をもっているので、機能語のような意味内容に関わりなく用いられる語彙にはある一定の特徴があるはずである。比較したファイル間の機能語の項目で、それぞれのファイルにしか用いられていない機能語の数が少なければ、それはそのファイルの作者同士が機能語に関して非常に似通った語彙をもっていることを表わしているであろう。そしてそれが同一作者の場合、当然機能語の用い方はその作者特有の傾向を示し、それぞれ一方のファイルでしか用いられていない機能語の数は少なくなると想像される。

そこで機能語に注目して表の２から５を見てみると、“ and the weary are at rest ”と*Wuthering Heights*を比較した結果は、“ and the weary are at rest ”と*Mary Barton*を比較したものとほぼ類似している。全語彙数に占める独自の機能語の割合は、BB : WH＝26／12461(0.20%)：572／71963(0.79%)、BB : MB＝24／12461(0.19%)：531／79484(0.66%)（ただし小数点第５位以下切捨て）となり、大きな差はない。しかし、同一作者による*The Professor*と*Jane Eyre*を比較した場合は、P : JE＝15／51720(0.02%)：34／112950(0.03%)と、共有しない機能語の割合が一桁少なくなる。

しかし、表は割愛したが同一作者による*Mary Barton*と*Moorland Cottage*を比較した場合には、MB : MC＝348／97484(0.35%)：８／26219(0.03%)となり、共有しない機能語の割合が全機能語の語彙数の0.1%を切るか切らないかだけでは、作者特定の決め手とはならないことがわかった。また、表５にあるように同一作者による作品の一部、すなわち*The Professor*の第１章と第25章間でも、P１：P25＝24／1948(1.23%)：201／4794(4.19%)という数字が出ており、単純に全機能語数に対する割合だけでは作者の別を特定できないことが明らかになっている。

以上のような点から、“ and the weary are at rest ”と*Wuthering Heights*の作者特定に関して、現段階では総機能語彙数に対する固有機能語彙の割合からは、有効な判定材料となる数値を得ることができなかった。

ⅲ）特定の機能語の出現頻度

そこで次に、ある特定の機能語に絞って、その出現頻度を作品ごとに比較してみる。機能語のなかには、例えば“ amid ”と“ amidst ”のように、意味も用法も同じという語がある。これらの語のいずれを用いるか、その傾向や特徴によって、作者を特定することはできないであろうか。そこでそうした語の組み合わせを作品ごとに検索し、その語数を比較してみたい。検索にあたっては、著者が共同開発した単語検索プログラム“ Searcher ”を利用した。

表６：特定の機能語の出現頻度

Words	BB	WH	MB	MC	P	JE
amid	6	3	1	1	2	3
amidst	0	0	2	0	8	20
	6	3	3	1	10	23
among	20	44	55	19	9	16
amongst	0	3	4	1	10	33
	20	47	59	20	19	49
before	23	123	191	51	88	219
ere	20	16	13	3	39	48
	43	139	204	54	127	267
can ’t	0	46	62	20	5	14
cannot	14	77	70	22	35	120
	14	123	132	42	40	134
on	120	776	883	210	565	1072
upon	26	17	106	39	45	41
	146	793	989	249	610	1113
till	14	150	103	33	46	112
until	0	1	28	4	2	3
	14	151	131	37	48	115
though	23	111	140	21	78	113
although	1	0	49	12	0	1
	24	111	189	33	78	114
toward	12	0	4	0	0	1
towards	1	44	52	17	30	52
	13	44	56	17	30	53
while	31	96	168	21	61	141
whilst	0	0	0	0	6	2
	31	96	168	21	67	143

検索した語の組み合わせは全部で19組である。[13] そのうち、作中にまったく出現しないもの、または出現しても回数が非常に少なく比較対照するのに適切でないと思われるものを除いた９組の結果を次に示す。数字は全テキスト中にその語が出現した回数を表し、語頭が大文字のものも含まれる。

さらに、これらのうちほぼ全作品に共通していて違いを比較するのに意味がないものを除いた５組の単語について、各組の出現回数の合計を1.00とし、それぞれの語の占める割合を示したのが次の表７、そしてこれを元に、作品間でおよそ傾向が一致した個数を表したのが表８である。

表７：各組の語の占める割合

Words	BB	WH	P	JE	MB	MC
amid	1.00	1.00	0.20	0.13	0.33	1.00
amidst	0.00	0.00	0.80	0.87	0.67	0.00
among	1.00	0.94	0.47	0.33	0.93	0.95
amongst	0.00	0.06	0.53	0.67	0.07	0.05
before	0.53	0.88	0.69	0.82	0.94	0.94
ere	0.47	0.12	0.31	0.18	0.06	0.06
can ’t	0.00	0.37	0.13	0.10	0.47	0.48
cannot	1.00	0.63	0.88	0.90	0.53	0.52
toward	0.92	0.00	0.00	0.02	0.07	0.00
towards	0.08	1.00	1.00	0.98	0.93	1.00

表８：およそ傾向が一致した個数

BB－WH	2	WH－JE	2
BB－MB	1	P－JE	4
BB－MC	2	P－MB	1
BB－P	1	P－MC	1
BB－JE	2	MB－MC	4
WH－MB	3	MB－JE	2
WH－MC	3	JE－MC	1
WH－P	2		

表８を見ると、*The Professor*と*Jane Eyre*, *Mary Barton*と*Mooland Cottage*のような同じ作者による作品間では、５組の単語の使用傾向のうち４組について傾向が一致している。この表からは、作者が同じである場合、特定の機能語の用い方にある一定の共通傾向が見られることがわかる。なかには*Wuthering Heights*と*Mary Barton*のように、作者が異なるにもかかわらず３という数字が示されている場合もあるが、これはいわゆるグレイ・ゾーンに当たり、どちらとも判別しがたい領域といえよう。しかし本論がその目的としている“and the weary are at rest”と*Wuthering Heights*に関しては、傾向が一致している数は２と低く、少なくともこの機能語の使用傾向からは、両作品の作者が同一人物であるという可能性はかなり低いということができるであろう。

おわりに

すでに見たように、*Wuthering Heights*がEmily Brontëではなく兄Branwell Brontëによって書かれたものであるという説には、さまざまな研究者が賛否両論を唱えてきた。これに対して、今回“CopyCatch Gold”と単語検索プログラムを用いていくつか検証を行なってみた。しかし、内容も分量もそれぞれに大きく異なる小説を比較対象としたため、類似を示す高い数値が示されたとしても単純にそれを利用することはできず、有効と思われる数値を得ることの難しさを実感した。データをどのように読み取るか、何を比較結果として有効とするか、またその基準はどこに求めるべきかなど、さまざまな問題がある。*Wuthering Heights*がBranwell Brontëの作であるか否かについては、現段階ではその可能性が低いということがいえるが、これについては今後さらなる研究や検証が必要になるであろう。

註

1　Tom Winnifrith, *The Brontës and Their Background : Romance and Reality*. Second Edition (Macmillan Press, 1988), p. 26.

2　Branwell作者説が唱えられる経緯とその後の研究に関しては、中岡洋編著『『嵐が丘』を読む』(開文社出版、2003年)に詳細に述べられている。

3　Alice Law, *Emily Jane Brontë and the Authorship of ‘ Wuthering Heights .’* (Accrington : The Old Parsonage Press, 1925)

4　Virginia Moore, *The Life and Eager Death of Emily Brontë : A Biography*. (London : Rich & Cowan, Ltd., 1936)

5　Ed. by Thomas James Wise and John Alexander Symington, *The Brontës : Their Lives, Friendships & Correspondence*. Vol. 2 (Oxford : Shakespeare Head Press, 1933), p. 56.

6　Mary Robinson’s letter to Ellen Nussey, dated 17th August, 1882.

7　Everard Flintoff,“ Branwell at the Heights : An Investigation into the Possible Influence of Branwell Brontë upon *Wuthering Heights* ” *Durham University Journal* 55(2), 1994, p. 248.

8　中岡洋「『嵐が丘』は誰が書いたか」『『嵐が丘』を読む』pp. 1−29.

9　Edited by Victor A. Neufeldt, *The Works of Patrick Branwell Brontë*, *Volume 3*, *1837−1848*. (New York and London : Garland Publishing, Inc., 1999), pp. 420−466. ただし、テキスト中、Nerfeldtが[ ]で付け加えている部分は除外した。

この断片は初期作品の“Angria”の世界がほぼそのまま継承されており、主人公はNorthangerland Houseに住むAlexander Percyである。Emilyが*Wuthering Heights*において彼女の初期作品“Gondal”の世界を類型的に利用していても、登場人物やセッティングはまったく別のものとして設定しているのと大きく異なる。また、この断片が*Wuthering Heights*と異なる点としては、ByronやScott等他の文学作品からの直接的な引用が随所に見られること、時事的な話題に頻繁に触れ、執筆された時代をダイレクトに感じさせることなどが挙げられる。しかし、Josephのようなヨークシャー方言を話す使用人が登場するなど、*Wuthering Heights*と共通する部分もある。ここでは、こうした印象批評とは異なるアプローチとして、コンピュータ・ソフトを利用する方法を考える。

10　*Op., sit.* p. 420, n. 1.

11　*Ibid.*

12　単語数についてはWordの文字カウント機能で調べた。各ファイル内の単語数は“and the weary are at rest”(22, 973), *Wuthering Heights*(117, 190), *Mary Barton*(159, 106), *The Professor*(88, 875), *Jane Eyre*

(188,031), *Moorland Cottage* (41,730), *The Professor* 1 (3,233), *The Professor* 25 (8,317), *Jane Eyre* 1 (1,946), *Wuthering Heights* 1 (1,941), *Wuthering Heights* 34 (4,413)。また、" and the weary are at rest "を除く各作品に関しては、http : //www.lang.nagoya－u.ac.jp /～matsuoka / Bronte.htmlのe-textを利用した。なお各テキストの語数は、どの版を用いるかにより若干の差が生じる可能性がある。

13 同義語の選定にあたっては、Laurence Urdang, *The Oxford Thesaurus:An A-Z Dictionary of Synonyms* (Oxford: Clarendon Press, 1991), リチャード・ショウスタック著、『英語類義語情報辞典[Ⅰ]』(大修館書店、1993) 他を利用した。また、検索対象として比較のために名詞の単数形／複数形、主格／所有格／目的格、形容詞の比較級／最上級、等の内容語もピックアップしたが、これらはやはりストーリーの内容によって出現頻度に大きなばらつきがあったため、ここでは省略した。

コンピュータ操作に関しては、本学短期大学部Douglas Sean Jarrell助教授に多大なご協力を頂いた。ここに深く感謝する次第である。